

5 月度 木曜例会

茨木市福祉文化会館

2019 年 5 月 9 日

Guest speaker: Ms. Chizhova Marina (Russia)

Title: 「世界 それぞれ子育てが違う」

マリナさん紹介

マリナさんは、4 回目のゲストです。

イギリスに 4 年間留学の後、ロシアに戻り、国立シベリア大学で学んだ後、来日し大阪大学で日本語、日本文化を専攻されました。

日本語の本も出版されていますが、本日は英語で講演していただきます。



今日は、ロシアの祝日にあたり、ナチス・ドイツに対する戦勝記念日であり、赤の広場ではパレードが開催されます。

本日は、私の日本で経験した出産前から子育てをもとに、他国のデータとも比較して、その違いについてお話ししたいと思います。

色々な質問やコメントをお願いしたいと思います。

妊娠と出産

妊娠は、男性には理解できない部分が多いと思いますが、女性にとっては一大事である。

まずは、妊娠すると色々の制限事項が出てくる。

リラックスできない。運動が十分できない。

おしゃれが出来ない。種々の制限がある。などなど

また、ロシアでは、柑橘類やパイナップル・マンゴー・キウイなどのトロピカルなフルーツをアレルギーの心配があるとして食べない。

コーヒーは飲まない方が良くなどということがある。

私の母は産科の医者で、妊娠は病気ではないので、コーヒーを飲んでも問題ないと言ってくれた。

ヨーロッパ諸国では、フランスが一番先進的であり、妊婦は、働いているし、水泳や 運動もするし、ハイヒールを履く人も多い。

ロシアでも水泳をするのは当たり前だが、日本は違うように思う。

食習慣は国によってかなり違うように思う。

妊婦の体重増加；フランス 10kg、日本 12kg、アメリカ 20kg、

ロシアやイギリスは 15kg 程度と国による差が大きい。

ロシアやイギリスでは 1kg ものアイスクリームを食べる妊婦もいる。

フランスでは低カロリーの食べ物が好まれる。

フランス病院食は、ワインを含め一般的な食事が出されることが多い。

麻酔を嫌う傾向があるが、痛みを避ける、苦痛による子供への悪影響やリスク回避という観点から見直すべきであると思う。

フランスでは、68%の女性が麻酔を受け、残りの人の多くは麻酔が間に合わなかったというデータがあり、大多数の女性が望んでいるということである。

アメリカでも 72%の女性が麻酔を受けているということです。

私自身の経験として、二回目の出産は麻酔を受けて、非常に短い時間で済みましたが、一回目の時は 48 時間かかりました。

私の母が日本の女性は非常にスリムだから出産が大変だろうと心配しました。

近年、帝王切開による出産が増加しており、ラテンアメリカや中国では 40% 以上、北アメリカでは 30%位だが、日本では 20%位でしょう。

しかし、通常分娩にはリスクもあり、帝王切開が必要な場合も多いが、心理的な抵抗もあるようですね。

個人的には、女性の教育なども通じて、必要に応じて帝王切開を抵抗なく受け入れるような施策が必要かと思います。

男性もいらっしゃいますので、ここらで話題を変えます。

子育て（出産後）

子供が高熱を出した時に日本では薬を与えない傾向が高い。(特に 6 か月未満)

私の経験で、39 度の熱を出した子供を病院に連れて行っても薬をくれず、氷枕で冷やすだけの処置であった。

ロシアでは高熱の脳などへの悪影響を心配する。

英仏米でも、高熱に対しては薬を使用する。

私自身の経験では、阪大病院などの進んだ医療機関は別だが、旧来の病院や伝統的な考え方を持つ人々は、薬を使いたがらない傾向があるように思う。

幼稚園の開始時期は、国によって大きな違いがある。

日本、ロシアは3歳、イギリス6か月、フランスは4歳（無料）。

日本とフランスは食事にも気を配っており、美味しい。

イタリアは簡単な食事が多い。ロシアはあまり食事に気を使わない。

私の子供の通う日本の幼稚園では、料理をして供され、幾皿かが出される。

フランスでも、焼き立てパンや幾種類かのチーズなどのちゃんとした料理が出されているようであり、その後の食生活に影響を与えていると感じる。

日本みたいに、食事するためにフォーク、スプーン、箸やハンカチやおしぼりを持たせて幼稚園に行くような国はどこにもない。

私たちがレストランにフォークやスプーンを持っていくことはないでしょう。

正直言って、幼稚園が準備したくないからとしか思えません。

ある幼稚園では、弁当まで持っていくことがあるようです。（悪夢！！）

弁当は、冬は冷たくなるし、夏は暑くなって美味しくないとはいけません。

こんな習慣は決して良いとは思いません。

母親は夕食も朝食も作るので、十分だと思います。

また、何にでも名前を書く必要はないと思います。



3歳位までは、子供はお母さんのスカートの陰に隠れるような仕草をする「スカート・キッド」を言われるように家族と共にいる方が良いと思う。

集団生活は、何らかの形で、その後、長く続くわけですから。

三世代が同居し、祖父母が孫の世話をできる状況になんて来ており、父母も職業をもっている場合が多くなっている。

ベビー・シッターやハウス・キーパーも必要となんて来ていていると思う。

ヨーロッパでは子供が友達やその家族などの他人と触れ合う機会が多い。

ロシア、ヨーロッパ諸国やアメリカでは、日本に比べてベビー・シッターが多い。

（日本では費用が高つく）

特にヨーロッパではフィリピンや旧植民地国からの外国人がベビー・シッターをつとめてくれるので、費用はそれほど高くない。



海外では、旅行にベビー・シッターを連れて行くのは結構当たり前である。

正直に申し上げて、祖父母であれ、ベビー・シッターであれ、育児を助けてくれる人の存在は有難いものです。

子供が生まれてからは生活が一変する。

夫は自分で何もやろうとしなかったが、徐々に助けてくれるようになった。

日本の川の字で寝るのは理解できない。

(夫はお乳をあげるわけではないから)

私の個人的見解ですが、

日本では夫婦関係が子供の誕生と共に終わってしまうように思うことがある。

親は夫婦であるべきだし、子供を加えての父母であるべきと考えます。

夫婦は2つの役割をバランスよく果たすべきではないかと思います。